

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ウズベキスタンにおける「独立以降」の考古学的調査：
ウズベキスタン考古研究所主催のシンポジウムより

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺村, 裕史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008483

ウズベキスタンにおける「独立以降」の 考古学的調査

—ウズベキスタン考古研究所主催のシンポジウムより

2016年6月、民博の「中央・北アジア展示場」がリニューアルオープンした。新しくなった「中央アジア」セクションの「オアシス都市の暮らし」では、ウズベキスタン共和国の首都であるタシュケント旧市街の民家の台所やハウリ（民家）の内部が復元され、その民家の精巧な1/10模型も展示されている。

それらの標本資料は、1979年の中央・北アジア展示場が開設された当初から展示されているものであるが、1980年前後の現地の人々の暮らしの様子を、視覚的にも明瞭に伝えてくれる貴重な資料である。また、収集時点においてウズベキスタンは旧ソビエト連邦の一部であり、外国人にとっては資料の収集にあたって大変な困難が伴ったことが想像できる。

外国人による現地での調査に広く門戸が開かれたのは、1991年の旧ソ連からの独立以降とあってよいだろう。私が専門とする考古学的な調査研究の領域にも、「独立以降」ということを強く意識した新たな動きがみられる。

考古研究所主催のシンポジウム

ウズベキスタンではタシュケントにつぐ第2の都市であるサマルカンドにおいて、2016年9月15日～16日にかけてウズベキスタン科学アカデミー考古研究所主催のシンポジウム、Archaeology of Uzbekistan

during the years of the Independence: Progress and Perspectives が開催された。

その直前の9月2日、1991年の独立後、およそ25年間の長期政権を担ってきたカリモフ大統領が死去するという、政治的に重要な節目となるであろう大きな出来事が起きた。それと連動するかのようになり、考古研究所主催のシンポジウムが「独立以降のウズベキスタンの考古学—発展と展望—」と題して催されたのは、偶然とも言い切れないような気がする。

シンポジウムでは、ウズベキスタン国内の考古学的な調査事例についてさまざまな報告があり、考古学研究がどのように進展してきたのか、また今後どのような方向性で進んでいくのかについて盛んな議論がなされた。

旧ソ連からの独立以前に、外国の調査隊がウズベキスタンに入って考古学的な調査をするにあたっては、さまざまな制約があった。しかし独立以降、国外の研究者にも徐々に扉が開かれるようになり、国際的な共同調査が次第に増えてきた。今回のシンポジウムにおいても、日本・フランス・イタリア・中国・ロシアなどの研究者が多数参加していたこともそれを裏付けるであろう。

そうした外国人調査隊も加えることで、ウズベキスタン国内のより広い範囲、さまざまな時期の遺跡調査が進んでいる。シンポジウムでの各発表内容も、古くは石器時代の遺跡調査報告から、シルクロードを通じた人と物の動きに焦点を当てた都市遺跡の発掘成果、歴史時代の仏教関連遺跡の調査など、対象とする時代やテーマは多岐にわたるものであった。

私が参加している日本の調査隊も、考古研究所との共同調査として、これまでダブシア遺跡の調査の実績があり（宇野・アムリディン編2013）、現在はサマルカンドの南東約12kmに所

在するカフィルカラ遺跡で発掘調査を実施している。

カフィルカラ遺跡では、シタデル（城塞）の上面から、火災によるものと考えられる赤く焼けた壁や焼土層、大量の炭がみつかった。現時点では推測の域を出ないが、8世紀初頭のアラブ勢力の侵攻と関係があるものと考えており、日本隊としてそれらの成果について発表した。

シンポジウムの個々の発表は先述のように多様であるが、研究所側による最後のまとめとして、「このような調査事例の増加によって新たな考古学的な知見や研究成果の蓄積がなされ、ウズベキスタンにおける考古学研究そのものが進展してきた」ということを、「独立」というタームと絡めて強調されていたのが印象的であった。

ウズベキスタンにおける考古学的調査の今後

独立以降、外国の調査隊にも門戸が広がり、現地調査そのものが可能となったこと、またそれにより上記のように新たな成果が得られていることは、研究者側としては喜ばしいことである。しかしその一方で、共同調査とはいえ、いわばよそ者である外国の人間が現地の貴重な文化財を「掘らせて」もらっているのだということを忘れてはいけないうだろう。今後は、こうした成果を、どのようにして現地の研究者や一般の人々と共有し、さらには現地社会へどうやって還元していくのかを、真剣に考えていかなければならない。

【参考文献】

宇野隆夫、ベルディムロドフ・アムリディン編
2013『ダブシア城—中央アジア・シルクロードにおけるソグド都市の調査』真陽社。

文・写真 寺村裕史

国立民族学博物館人類文明誌研究部助教。専門は情報考古学、中央アジア研究。著書に『景観考古学の方法と実践』（同成社2014年）、論文「古代シルクロード都市遺跡の比較研究—出土遺物のデジタルアーカイブ化を通して」『公益財団法人三島海雲記念財団研究報告書』第52号（2015年）などがある。



カフィルカラ遺跡シタデル（城塞）で検出された大型建物遺構（2015年9月、サマルカンド近郊）。